

2014 年度名古屋学芸大学健康・栄養研究所 研究・実践報告

■研究・実践の課題（テーマ）

実践性の高い食育教材開発に関する研究と実践

ー「さかな丸ごと探検ノート」を活用した食育プログラムのマニュアル作成

■主任研究者 足立己幸

■共同研究者 上原正子、林紫、伊與田敬子、丸山真奈美、浅田由美、安達内美子

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

1) 目的

2010-2013年に一般財団法人東京水産振興会から研究助成を受け、本研究所の研究・実践の一環として、「さかな丸ごと探検ノート」（以下、「探検ノート」）を活用した小中学校における実践・研究を行ってきた。2013年度はさらに「探検ノート」を活用した特別活動の指導案6例、教科の指導案4例を新たに作成し、いままでの指導案と合わせた19例からなる学習計画を作成した。本年度は、①学習計画に基づいた指導案が実践性の高い食育プログラムであることを検証する、②作成した食育プログラムが子どもたちの食環境に対応できるものかどうかを検討する、③全国的に活用できる食育プログラムとしてのマニュアルを作成することを目的とした。

2) 方法

- ① 実践性の高い食育プログラムであるかどうか、「探検ノート」が食育のどの視点を深めるものになるのか等について、公開検討会を開催し、食育を担当している栄養教諭の方々に参加していただく。
- ② 作成した指導案を基に栄養教諭（客員研究員）が各学校で授業を行う。
- ③ 「探検ノート」を活用した実践事例を食育プログラムマニュアルとしてまとめる。

3) 結果

『さかな丸ごと探検ノート』を活用した食育プログラム検討の事例報告と『学校の食育』における教材としての検討会」を公開で実施した。県内栄養教諭が6名、大学院生1名の参加があり、助言者として愛知県教育委員会健康学習課主査（校長経験者）の参加を得た。検討会の趣旨説明、研究経緯の説明、事例報告により進め、研究の検討・討議を行った。検討会では、魚を食育の題材とする教育的価値の理解を図ることや、教員と栄養教諭が協働して進める必要があるものの、進めるためには栄養教諭の高い専門性が必要であることが示唆され、魚の循環を意識した指導をどうすすめるのか、子どもの態度や行動の変容をどう捉えるのかが検討された。

客員研究員が行った食育の授業は、2013年度に作成した新たな指導案を活用して継続的な指導ができるよう、1年間通した計画や6年間通した計画など、学年や発達段階に応じた取り組みとなるよう計画して実施した。そしてその授業の内容を盛り込んだ「魚から

の『食育』はおもしろい」(食育プログラムマニュアル)を作成した。このマニュアルには研究してきた「さかな丸ごと探検ノート」の教材性ととも、実践してきた授業のおもしろさを掲載した。また、食育の授業の組み立て方の例として『さかな丸ごと』の授業をつくる」には3例を掲載した。「6年間を見据えた『さかな丸ごと』の体系をつくる」「食育の日(学校公開日4年生に位置付ける)」「『さかな丸ごと』が3年生の1年間をつなぐ」は学習指導案を資料として載せた。さらに評価については昨年度の研究の成果を踏まえて、実際の授業で取り組んだ評価の観点をまとめ、掲載した。

4) 考察

検討会により、魚を食育の教材とすることの有用性が明確になったことは意義あることだと考える。

また、マニュアル作成にあたり、授業実践を進めながらまとめることができたことは学校において実践可能なプログラムになったと考える。今後はマニュアルを活用した事例を集め、さらに改善していくことも必要である。